

夜空に浮かぶ漆黒の岡山城で思い出に残る夜を



灯源郷



秋の鳥城灯源郷

岡山城では晴れの国おかやまデスティネーションキャンペーンに合わせて今年初めて岡山後楽園の幻想庭園と同時に「春の鳥城灯源郷」(4月29日～5月31日)を開催しました。行灯や和傘などで岡山城周辺のライトアップを行ない、天守閣内の備前焼工房では灯源郷期間中限定のマグカップやジェルキャンドル作り体験も開催しました。瀬戸内市在住の吉近翔太さんによる竹あかりの展示もあり柔らかな灯りに包まれました。

「夏の鳥城灯源郷」は、昨年同様に岡山後楽園の幻想庭園と期間を統一し8月1日～8月31日まで開催中です。恒例の中国デザイン専門学校による「灯りのアート」(8月10日～14日)は天守閣前広場にキャンドル約1500個を使い巨大アートが描かれました。備前焼工房ではこの時期だけの風鈴作り体験もできます。天守閣内の城主の間では、天守閣寄席と題しまして落語、演芸などさまざまなイベントをご用意しています。

「秋の鳥城灯源郷」も11月18日～11月27日まで開催します。陽射しの下での紅葉だけでなく暗闇に浮かび上がる紅葉も味わい深いです。同期間開催される岡山後楽園の「秋の幻想庭園」と合わせてお越し下さい。お待ちしております。

編集後記

本協議会も創立25周年を迎え、会報も50号と版を重ねてきました。年2回ではありますが、加盟館各館の特色や活動を記事としてきました。25年前と比べ、美術館・博物館の社会や地域での役割はずいぶんと変化してきたように思います。この夏も各地でさまざまな展覧会やアートイベントが開かれています。これらが一過性の打ち上げ花火(花火は綺麗ですけど…)に終わらず、地域や人の心にじっくり根をはるものにしていきたいものです。

(事務局) 岡山県立美術館 福富 幸

岡山県博物館協議会会報

岡山の博物館

No.50 平成28年8月発行

編集・発行 岡山県博物館協議会

会長 守安 収

事務局

〒700-0814 岡山市北区天神町8-48

岡山県立美術館内

TEL 086-225-4800 FAX 086-224-0648

岡山の博物館

岡山県博物館協議会会報 No.50 平成28年8月

CONTENTS

- P1 わが館のイチ押し 浅口市立鴨方郷土資料館
- P2 館長随想「岡山県博物館協議会に想うこと」(岡山県立美術館長 守安 収)
- P3 平成27年度 第2回研修会「美術作品の撮影について」
- P4～P5 平成28年度 総会報告／記念講演会
- P6～P7 加盟館からの便り(「美作三湯芸術温度」キュレーター)
- P8 気になる情報コーナー(夜空に浮かぶ漆黒の岡山城で思い出に残る夜を)

わが館のイチ押し

浅口市立鴨方郷土資料館 「先人の技術に出会える場」

当館は鴨方図書館と併設しており、浅口市鴨方町の中心部である文化・体育施設の集まった総合コミュニティゾーン「天草公園」内にあり、昭和58(1983)年2月に開館しました。

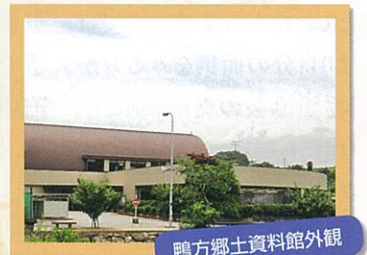
主な収蔵品は、郷土先人の作品や資料、手延素麺等の地場産業資料、山陽自動車道建設に伴い発掘調査された遺跡から出土した考古資料等が中心であります。

鴨方町は、江戸時代に岡山池田藩の支藩「鴨方藩」の中心地として発展し、多くの瀬戸内の文人が交流した歴史のある町であります。里謡に「鴨方に過ぎたるものが3つある 拙斎 索我 宮の石橋」と謳われているように、江戸時代に老中の松平定信が行った寛政の改革に、地方から影響を与えた儒者の西山拙斎や京都の仙洞御所の襖絵を描いたといわれる絵師の田中索我が生まれた地で、当館ではこれらの資料を中心に収集しています。

民俗資料では、今日も鴨方町の手延素麺は名声を高めておりますが、江戸時代から伝わる手法の手延素麺の水車を利用した製造機具を展示しています。なかでも、地元花こう岩を使用した石臼や水車大工の英知を結集した元掛機・小のぼりがけ・八角・大じょうご等の大型機具から水車製粉技術を学習することができます。また、明治時代から戦前にかけて旧浅口郡の農家の副業として盛んに行われた麦稈真田の製造道具や製品等を展示しています。これは全国でも貴重な民具といわれています。

また、昭和55(1980)年に発掘調査された沖の店遺跡(鎌倉時代)は、原型のまま遺跡からの切り取り保存しており、中世の窯としては県内でも貴重な展示物となっています。

当館は、伝統的地場産業の歴史の保存とともに、郷土先人の資料を中心に公開し、生涯学習の講座とタイアップしながら、各時代に果たした産業の役割や偉人の業績等を後世に広く継承するよう努めています。



鴨方郷土資料館外観

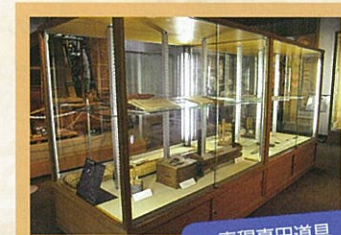
〒719-0243 浅口市鴨方町鴨方2244-13
TEL 0865-44-7055(文化振興課)
休館日 月曜日、毎月末日、祝日、年末年始
開館時間 9:00～17:00
入館料 無料



素麺作り展示



展示状況



麦稈真田道具



田中索我の作品

岡山県博物館協議会に想うこと

岡山県立美術館長
守安 収



本協議会が設立され、今年は25周年を迎えました。加盟する77会員館がそれぞれの活動に励むのは当然のことですが、団体として連携協力しながら本会が続いてきたこと自体、何よりも素晴らしいと思います。そしてそれを支えてくださった賛助会員の方々、県下の教育や行政関係者を含む大勢の協力者、県外の博物館施設や職員の皆様方には心からお礼申し上げます。私は現在、会長職に就いていますが、設立時から係ってきた経緯があります。この度の会報発行に際し、事務局から「原稿を」との要請がありましたので思い出話を交えて一文を認めてみました。

会の発足は、県立美術館長初代館長であった故小野年之氏の強い意向で実現しました。1991年の発足時点では加盟館(園)数は59。正直なところ、開館からまだ日が浅い頃のことでしたから県美の中では、事務局として他館の世話をより自分の面倒をみる方が大事ではないか、岡山には日本博物館協会の支部もあるし、全国美術館会議といった全国組織にも加盟しているので、それ以上に手を広げなくてもよいのではないかと、といった感じでした。何を隠そう私自身もその一人でした。しかし設立の意志が固かった館長に否応なく引っ張られ、新たに構想した岡山県博物館協議会は、文部省のいう登録施設も類似施設も関係なく、地域で博物館活動を展開しているところは公立・私立、館種を問わず、大きい館も小さいところもすべて包括するという形でスタートしたのです。

そして「加盟館の費用負担は少なく、事業は活発に」という方針の下、県下の博物館関係者が一丸となって企業相手に賛助会員の獲得、つまり資金源の確保に取り組みました。スタート時は42法人でした。当時はまだバブル崩壊前で、メセナという言葉が新鮮な響きをもっていた時期でもあり、比較的協力を取り付けやすかったのかもしれませんが。親会社に賛助を依頼した館があったり、われわれも人脈を頼りにメセナに関心がありそうな企業を回ったりしました。現在は当初に比べ、賛助会員数も残った会員の口数も減りました。しかし、加盟館の拠出金だけでは到底発行できない博物館紹介冊子やマップを継続的に更新しながら無償で提供できているのは、今なお応援し続けてくださる賛助会員の方々のおかげです。

今年度は、いつもの活動に加え25周年記念事業として3

本の大きな柱を立てました。

- ①博物館をめぐるスタンプラリー。備前・備中・美作の3地区のうち2つ以上、4館の博物館を訪ねるという企画です。最近流行のオリジナルマスキングテープといった景品もついています。
- ②加盟館の学芸員たちが、各地の博物館へ出張して講演・講座・ワークショップを開くというもの。延べ32人が32の催しを19会場で行います。結構大規模です。さまざまな専門分野をカバーする人材交流は協議会の切り札の一つといえます。
- ③各館紹介画像をパネルにして加盟館を巡回させるというもの。ほぼ1年間にわたって開催しますが、一般には意外と知られていない各館の持ち味が伝わることでしょ。

こうした事業が成り立つのは、互いの信頼感があってのことです。協議会の設立と継続の意義はまさにここに見出すことができます。情報交換や研修を事業の中核に据え、活動を継続することを通じて、県内の博物館職員の相互理解が深まると同時に他館のことを思いやる心が生まれました。博物館施設に勤める仲間の顔が浮かんできます。加盟館からもたらされる企画が提案レベルから実現に至るまでには、いろいろな形で館と事務局、また館同士でのやり取りがあります。時間はかかりますが、双方向で積み重ねることで信頼と協力体制が強まり、より良い事業へと昇華していくようです。

博物館は地域のアイデンティティーを理解する上で恰好の施設です。各館の設立目的、運営方針は百館百様。自己責任が原則ですが、何もかもすべて自己完結せねばならないわけではありません。館が地域サービス、教育サービスを活発化させるために必要なヒトやモノ、ノウハウはいろいろなどから積極的に取り込み、受け入れていけば良いと考えます。そのお手伝いの一番手が博物館仲間であり、協議会の事務局が仲介します。協議会の創設に気乗りしなかった私が、軌道に乗った今になって鼓舞礼賛するのもお恥ずかしい限りですが、君子ならぬ凡人豹変もありとしてご容赦ください。

最後になりましたが、これまで尽力くださった関係各位に改めて感謝の意を表明させていただきます。これからも協議会を介して共に歩んで行きましょう。

「美術作品の撮影について」

日時：平成28年2月17日(水) 13:30~16:00

場所：倉敷市立美術館3階第2会議室

講師：秋山 嘉邦 氏(カメラマン)・中田利枝子 氏(岡山県立美術館学芸課長)

研修に参加しての感想

今回の研修は、所属する美術館が会場ということで、館所蔵品から被写体として洋画・日本画・工芸・現代美術のジャンルから、池田遙邨「海岸風景」・「麗日」、小山富士夫「南蛮水指」、工藤哲己「危機の中の芸術家の肖像」、以上の4点を選ばせていただきました。

学芸員自身が作品を撮影するための研修というよりはどちらかと言えば、カメラマンの撮影に立ち会う際、どのような知識を持っていたらよいか、といった趣旨の研修でした。プロ任せで撮影を眺めているのではなく、作品をよりよく見せるためにはどうしたらいいか、きちんと考えながら撮影に立ち会うことが必要なのだと、改めて感じました…と言うと格好がよいのですが、当館の人手不足もあり、当日は私自身軽い恐慌状態だったのが実情です(事務局ならびに参加者の皆様に、色々ご迷惑おかけしました…)。

さて、研修では、蛍光灯、ストロボと、撮影する状況を変え、撮影した画像をパソコンのモニターで見ながら説明を受けました。撮影に際して様々な注意点があげられました。例えば撮影前のホワイトバランスの調整や、光源はストロボなど移動可能なものにして作品に対して90度の角度に設置し、光を柔らかくするには紗をかけるるとよいこと。立体の撮影には、表が白、裏がグレーのレフ板を準備すること(ただし白磁ではNG)、等々。

軸物などが横折れで線が目立つ場合、横からライトを、縦のシワが目立つ場合、上下からライトを当てること…といった注意を受けつつ、使用した作品は折れがなく例としては判りにくく、選択する作品について細かく打合せすべきだったかと反省。一方立体作品、特に工藤作品については、照明のあたる位置や角度によって作品の見え方が全く違い、作品のインパクトと相まって興味深く、また研修後、若い学芸の方から「工藤哲己は知らなかったけど、格好いいですね」と何だか嬉しくなるお言葉をいただきました。

その他にも退色した作品の補正方法について、撮影したデータの保存形式についてなど、すぐさま現場で使える内容の質疑応答が飛び交う、熱気ある研修でした。

現在では撮影された画像のPC上での修正が可能になりましたが、それでも誤魔化しがきくものでもなく、学芸員の作品への理解が出来上がった画像に反映されるのは、今も昔もおそらく変わりはないでしょう。拙文を書くにあたり、自らの作品と向かい合う姿勢そのものについて、改めて考えさせられました。

(倉敷市立美術館 佐々木千恵)





本年度総会が5月24日(火)、岡山県立美術館において開催されました。
加盟館77館中66館(委任状24館)、賛助会員を含む57名が参加しました。

次 第

■ 会長挨拶 岡山県立美術館長 守安 収

議 事

- (1) 平成27年度事業報告について
- (2) 平成27年度収支決算書(案)について
 - 監査報告について
- (3) 平成28年度事業計画について
- (4) 岡山県博物館協議会規約の一部改正について
- (5) 平成28年度収支予算(案)について

以上、すべて承認されました。
- (6) 25周年記念事業について
- (7) 各館提出議題
 - 吉備路文学館より「博物館入館者数にみる現状と今後の課題」
- (8) その他
 - 岡山県産業労働部観光課より「岡山県の観光施策について」

- 岡山芸術交流実行委員会より「岡山芸術交流 Okayama Art Summit 2016について」
 - 岡山県教育委員会文化財課より「防災ネットワークについて」
- ★25周年記念事業については、総会に先駆けて本年度4月より県内各地の加盟館にて、加盟館紹介パネル展示ならびに加盟館職員による連続講座やワークショップを開催。また7月から11月にかけて加盟館を巡るスタンプラリーを開催します。

総会終了後、「岡山の自然と自然保護」と題し、岡山県自然保護センター西本孝氏による記念講演会を行いました。

平成28年度事業計画(今後の予定)

- 25周年記念事業(平成28年4月～平成29年3月)
 - 加盟館紹介パネル展示・加盟館職員による連続講座及びWS・スタンプラリー
- 研修会 大規模震災について考える

日程：平成28年12月頃開催予定
場所/講師：未定
- 普及広報
 - ① 岡山県博物館協議会25周年記念事業
 - ② 会報「岡山の博物館」(No.50・51)の発行
 - ③ 加盟館・賛助会員への会員証(優待券)の発行



「岡山の自然と自然保護」

講師 西本 孝氏(岡山県自然保護センター主任研究員)



岡山県自然保護センターに主任研究員として勤務され、湿原の保護・保全に取り組まれると共に、県内の自然保護・自然環境の復元に取り組まれている西本孝氏を講師にお迎えし、植物を中心とした自然解説、自然環境学習のためのプログラムの開発実践なども含めてお話をいただきました。

○自然保護とは

人の関与がほとんどない原生的自然は、県内のわずか1%しかない。岡山県はほとんど人の手によって作り替えられた自然である。

学生時代、徹底的に指導を受けたのは、植物を集団として見る、という考え方。一緒に生えている植物が必ずあり、どうしてだろうかという事を考え、自然保護の現場を歩き、いろんな事を経験した。そのうちのひとつが、必ず犠牲者がいらっしやる、という事だった。開発と自然保護の狭間で、幾人も犠牲者を見てきた。この事が、自然保護という事を考えるきっかけになった。

自然保護というのは、自然が豊かであれば存在しない概念。有限である、と感じたと同時に、地球全体を維持するためにどうしたらいいのか考えないといけないという事になる。ヨーロッパの考えを日本に取り入れ、保存・防御・保全・復元・再生という5つの管理目標が考えられた。大きく考えると、元々ある自然に手を加えず、自然の為に自然を守る保存という考え方と、もう一つは、手を加えながら管理し、人間の為に自然を守る保全という考え方の2つにまとめられる。

○自然保護活動

自然保護活動の例として、白神山地のブナ林や尾瀬ヶ原の湿原がある。岡山県では、毛無山のブナ林の保護などが行われてきた。それらの活動や、国際的な動向を考慮し、1995年に生物多様性国家戦略が策定された。

現在、多くの身近な生物が絶滅し、さらに多くの身近な生物が絶滅に直面している。歴史上、5度の大量絶滅があり、現在は6度目の大絶滅を迎えているといわれている。1975年から2000年までの25年の間に毎年4万種が絶滅しているという恐ろしい指摘もある。よく知られている5度目の大量絶滅にあたる恐竜が絶滅した時は、毎年10～100種が絶滅し、60万年かかったと考えられており、現在と比べると絶滅のスピードは極めて緩やかである。5回の絶滅の原因は、隕石が衝突したり、火山活動で地球全体がガスで覆われて、太陽光線がさえぎられ、そのために地球全体が寒冷化した事による。ところが現在は、隕石も衝突していないし、火山活動も起きていない。

そこで、自然共生社会という言葉が生まれ、私達の生活を見直すという事が求められる。生物と自然環境はお互いに相互関係を持っている。多様な生き物が、きれいな水、きれいな空気を作り出し、自然災害を防御し、多様な文化も生み出している。これを生態系サービスと言っており、日本ではご利益という言葉がある。

自然との共生を改めてみなおし、自然と共に生きるという時代で、大切になってくるのは自然に対する正しい理解だと思う。

○岡山の自然は人が作り替えたもの

旭川の河川敷のセイヨウカラシナという植物の群生がある。今は特定外来植物に指定されているので、持ち帰って庭に植える事はできない。そういった正しい認識をする事から始めなければならない。

身近な自然を見直すなかで、出てくるのが、里地・里山・里海、という言葉である。日本は自然を破壊せずにうまく付き合ってきた歴史を持っている。そこには必ず手入れがあり、これがまさに保全的自然保護ということだという事に気が付く。戦後、アメリカやヨーロッパの影響が大きくなって、高度経済成長を遂げるなかで、自然は支配できるという考え方が生まれた。冷戦後、このままでいいのか、というところから、日本型の自然保護思想が出てきた。

里地・里山・里海を詳しく見ると、里地は稲作を中心とした、人と自然が関わりを持つ地域。田んぼ・池・里山・植林で構成される。里山は人が関わる事で維持されてきた採草地や森林の事を指す。森林は二次林とよばれ、低木は燃料に使われ、落ち葉は堆肥に使われる。採草地は二次草原で、草は牛馬の飼料や肥料に使われた。里海は、沿岸の海で、人手が加わる事で、生物生産性と多様性が高くなった地域を指す。

これらの、人と自然が触れ合って作り替えられてきた岡山の自然を理解する為に、環境学習指導者養成講座を企画し、1999年から10年間実施した。人々が自然を利用して維持してきた地域に向向いて、現地の事をよく知っている指導者を探し出し、話を聞いて、昔ながらの方法で作業を体験する、というコンセプトで行った。そうすると、岡山の自然が少しでも分かるのではないかと考えた。人が自然を利用してきた地域をリストアップすると、里山・採草地・植林地・炭焼き山・禿山があり、この5つで講座を展開していった。

各地で長老の方をお招きし、実際に作業をして、慰労会にも参加させていただいた。作業では、草の刈り方、束ね方、鎌の手入れなどまで行って実践した。このような体験をした参加者からは、伝統的な文化財としての価値を、ぜひとも受け継いでいかなければいけない、貴重な文化であるなどの感想がよせられた。

○自然との共生

私達は自然とどう向き合うのか、という事を考える時期にきている。キーワードは多様な生き物と共生社会という言葉である。学者が解決してくれるわけではない。私達が、私達の身近にある自然にいつも触れる事で解決できるのではないだろうか。地産地消を心がけたり、旬の食べ物を食べる、食べ残しは出さない、農業は必要最低限にする、といったような事を繰り返し、岡山県が県民総出でつくりあげてきた文化を見直す事で、共生社会をつくりだしていく、という事が今後求められていくと思う。

(編集 津山郷土博物館 東万里子)

「美作三湯芸術温度」キュレーター

温泉宿 × アート

新しいアート・イベントが岡山に誕生しました。

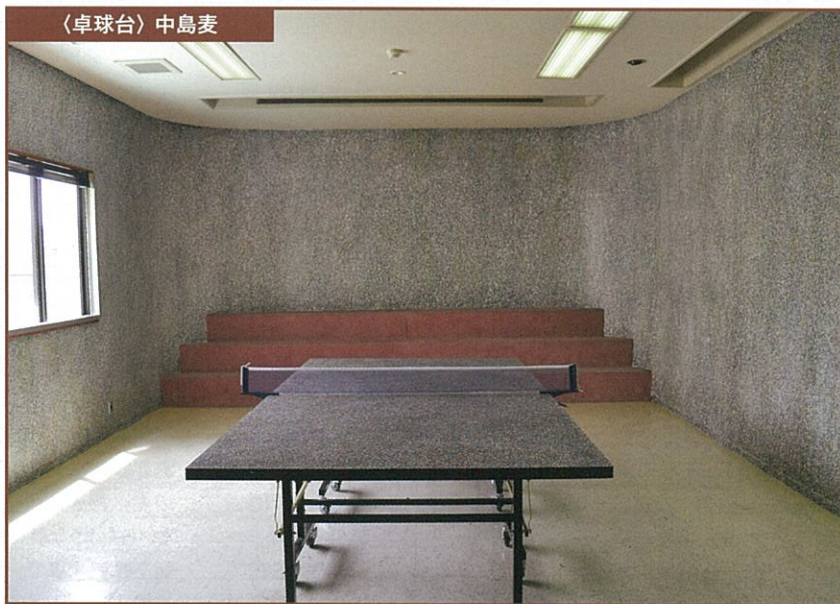
『美作三湯 芸術温度』は、温泉でアートを楽しむ事業として岡山では9年ぶりの「おかやまデスティネーション・キャンペーン」期間に併せて前年度から計画され、同時開催になった「第3回瀬戸内国際芸術祭」とも連携可能なアートイベントとして位置づけ実行されました。

今回のイベントの舞台・キャンパスとして取り上げたのは“美作三湯”で、豊かな自然環境に囲まれた西日本有数の温泉地です。温泉は地下深くから湧き出る自然の恵みであり、生命の泉であり、不思議な力の源でもあり、貴重な資源でもあります。

この温泉地を舞台に、県内外の気鋭のアーティストを招いて、展示を通し、この場所でしか味わうことができない新しい文化価値を創造・発信していく狙いで始めました。

『みまさかさんとう げいじゅつおんど』という聞き慣れない変わったネーミングですが、『温泉のお湯の温かさ、温泉宿で受けるあたたかいおもてなし、アート鑑賞をした後の感動や発見など、実際に体感することで得られるさまざまな感覚を「温度」という言葉に託し、訪れる人々にここから発せられるそれぞれの「温度」を感じてもらいたい、そしてその作品から新しい感動や発見をしてもらいたい』と願う主催者側の強い願いと想いを込めてつけたネーミングです。

また、宿側の理解度や施設のスペースによっても展示作品の形や規模において、それぞれ異なる訳ですが、そのような部分を見ていただくのも「温度」差というタイトルと繋がって来るともネーミングの性格を現す特長にもなっていると思います。



湯郷温泉(湯郷グランドホテル「白梅の間」)(写真撮影: 遠山健一朗)

アーティストの持つものの見方や感じ方は独特です。我々が普段の生活スタイルの中で見落としている部分や忘れてしまいがちな事象、あるいは全く予測不可能な新たな世界の存在を知らしめてくれ、実に多様で刺激的。彼らの見方や感じ方を非日常的な場所である温泉地域にあてがい地域固有の歴史や文化の中に混在させることで、三湯の奥深い世界を感じていただき、町や人との新しい出会いや交流の場が生まれるなど、温泉宿の魅力の再発見に繋がり、また、県南や県外の人たちから縁遠いイメージを払拭させ、強いては県北全体を楽しむきっかけになっていくことを希求した県内初の回遊型アートイベントでもあり、文化・観光スポットの構築を目指していくものでもあります。

会場は、湯郷温泉地区で10軒、湯原温泉地区で8軒、奥津温泉地区で4軒の旅館組合に所属する旅館施設が参加して下さいました。これはほぼ全部が参加していることになります。

作家は県内外16名のアーティストですが、私はアーティストの選定と温泉宿とのマッチングを担当させていただきました。

県からの打診があったのは今年の7月中旬頃で、実際に温泉宿に挨拶と現地の下見に伺わせていただいたのは8月初旬頃から9月下旬頃にかけてです。何回かに分けて温泉宿22軒を一、二度と挨拶を兼ねた下見をさせていただき、その時の記憶や打ち合わせ内容、宿の雰囲気を手がかりにアーティストを選定していきました。

アーティストの選定の条件として、宿の雰囲気を壊さないように、それぞれの宿の空間に寄り添った展示が可能な作家、また作家が一方向的に作った作品を展示するだけでなく、宿側とのコミュニケーションを図りながら進められる作家を念頭に選定していく中で、特に勤務先であります奈義町現代美術館で約15年の間に紹介した作家50人ほどの中からまずは絞り込んでいきました。

今回は、県内作家の太田三郎(津山市)、樫尾聡美(総社市)、草間喆雄(赤磐市)、胡桃澤千晶(倉敷市)、柴川敏之(岡山市)、高本敦基(真庭市)、堀口華江(赤磐市)、藤原裕策(倉敷市)に、県外作家の小野耕石(千葉県)、鈴木紗也香(東京都)、高松明日香(香川県)、徳持耕一郎(鳥取県)、中島 麦(大阪府)、船井美佐(東京都)、松岡 徹(愛知県)、母袋俊也(神奈川県)の計16名の気鋭のアーティストの参加の内諾を得ました。

次は彼らに現地を下見していただかなくてはなりません。昨年10月13日から始まったアーティストによる現地下見はアーティストと私と宿側の都合とが一致しないといけなために特に時間を要し、年明け前には終わらせるつもりでしたが、結局年を越してしまい今年2月ようやく下見が全員終わることが出来ました。調整の結果、アーティストには1軒から2、3軒の温泉宿への作品展示を依頼することで落ち着きました。

それぞれのアーティストは、温泉宿の空間の特徴を基盤に展示場所の条件やその場所にまつわるエピソードや伝説、手がかりになる史実などを紐解きながら効果的に作品を配置し空間づ

くりを進めていきました。温泉宿はギャラリーのような“展示するための空間ではない場所”での展示ですからアーティストによっては相性良くすんなり展示できたアーティストやギリギリまで悪戦苦闘したアーティストと対応はまちまちでした。温泉宿側も初めてのこともあり、半信半疑の状態でも協力しながら何とか初日に間に合いました。

全国的にみても、温泉宿を展示の中心舞台に据えたアートイベントは、愛媛の道後温泉「オンセアート」や大分の別府温泉での「混浴温泉世界」が特に有名ですが、『美作三湯芸術温度』はそれらのいずれとも規模や距離が異なる温泉地の中で、三湯がそれぞれ異なる歴史や性質、場所や距離があるために上記のイベントとはまた異なった形態の新しいイベントになったと思います。

ご参加くださった三湯全ての温泉宿、関係者、参加アーティストをはじめ、イベント期間中にお越しくださり、ご参加くださった全ての皆さんにこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

また、当事者の中にこのイベントを一回きりで終わらせないようにとのご希望もいただき、心強く温かい励ましを得て感謝しております。

(奈義町現代美術館館長 岸本 和明)



湯原温泉(菊乃家旅館)(写真撮影: 遠山健一朗)